

〈論 文〉

ソーシャルワーク理解とケアワークとの関連

——社会福祉実習生アンケート調査の分析から——

土田美世子・高松 智画

1. はじめに

本稿では、社会福祉士養成課程で実施される社会福祉援助技術現場実習（以下、社会福祉実習と略す）において、どのような実習項目がソーシャルワークの学びに関連するかについて検討する。

社会福祉士養成における実習は「ソーシャルワーク実習」と規定され、介護福祉士養成等で実施される身体的ケアや生活支援を実践する「ケアワーク実習」とは一線を画することが求められる⁽¹⁾。「相談援助職」としての社会福祉士の専門性を実践の中で学ぶことは重要だが、一方で、利用者との信頼関係をまず形成する必要がある段階の実習生が、利用者に対して相談援助を実践することは困難である。このため、相談援助職の実習は、ソーシャルワーカーの援助場面の見学や、職務についての話を聞く形式になることが多い。後で述べる本稿の調査結果でも、面接等を実習で実施したものの割合は1割強にすぎない。23日間の実習中、実習生は主として配属された施設・機関の機能を学び、利用者との関わるなかで様々な支援と取り組む。対象となる利用者の発達段階、特性により、支援としてケアワーク（身体的ケア、生活支援）を実践する場面も考えられる。

そもそも、生活型の施設においては、生活場面面接等の、利用者の身の回りの世話をするケアワークや生活支援に伴い、ソーシャルワークが実施されることが知られる⁽²⁾。また、利用者を理解し信頼関係を形成する段階においては、ケアワークは重要なコミュニケーションツールとなりうると考える。つまり、「一線を画す」ことが求められているケアワークは、本来は「ソーシャルワーク

実習」の中に、利用者理解のツールとして組み入れることが可能ではないだろうか。

本研究では、社会福祉実習生へのアンケート調査の分析を通じ、ソーシャルワークの学びと関連の深い実習項目について検討すると共に、ケアワーク実践とソーシャルワークの学びとの関連について考察する。

2. 研究の視点および方法

龍谷大学社会学部地域福祉学科、臨床福祉学科3、4回生のうち、2013年度「社会福祉援助技術現場実習（以下、実習と略す）を履修した学生179名に対し、実習前後に3回の質問紙調査を実施した（ただし、3回の調査全てに回答した学生は169名）。実習を経験することによる学生の変化と実習内容の関連を調べるため、同じ質問項目を含む①実習前のpre調査②実習後のpost調査、及び経験した実習内容について詳細にたずねる③実習内容調査、いずれも質問紙調査（自型式）を実施した。調査実施時期は2013年9月、及び12月である。

①pre調査においては、実習生のこれまでの、子ども・高齢者・障害者に対するケア経験の有無、実習参加動機、課外活動経験等、プロフィールを確認すると共に、実習生の学びとの関連が想定される個々の共感性を「多次元共感性尺度（鈴木・木野、2008）」により調査した。また、社会福祉施設・機関で実施される支援項目について、実習前の段階で「ソーシャルワークに必要と感じる程度」や、その他実習前の準備状況等についてたずねた。この結果については、須賀（2013）が報告済である。②post調査においては、実習後の

実習生の学びと変化に焦点をあてた。pre 調査でもたずねた各支援項目に対する「ソーシャルワークに必要と感じる程度」について再度質問し、変化について分析した。その他、実習後の進路変化、実習での学び、困難の解決方法等について質問した。この結果は近藤（2014）により報告済である。③実習内容調査においては、実習生が経験した実習項目を明確にし、実習でのソーシャルワークの学びとの関連について検証した。ソーシャルワーカー職務を学ぶ機会の有無、その他ソーシャルワークと関連する内容を学ぶ機会の有無、ケアワークの実施、スーパーバイズ等について、実習生が経験した実習項目を詳細にたずねた。本稿では③実習内容調査に基づく考察と、3 回すべての調査を用いてのソーシャルワークの学びに寄与する内容、ケアワーク実施とソーシャルワークの学びの関連についての検証を報告する。

調査票の集計及び分析には、IBM SPSS Statistics 22、及び自由回答の分析には IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を用いた。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し実施した。また、質問紙調査の実施にあたっては調査の趣旨を説明し、結果の公表について周知した上で回答を求めた。集計に際して各回答者に ID を割り当て 3 種類の調査での対応を確保すると共に、匿名性の担保を徹底し、データの扱いには細心の注意を払った。

4. 実習内容調査の概要

(1) 調査目的と調査項目

実習内容調査の目的は、実習生が各実習施設で経験した実習項目とソーシャルワークの学びとの関連を検証することである。とりわけ、生活型施設では経験することの多いケアワークが、ソーシャルワークの学びに関連するかどうかについて確認するため、実習で体験したケアワークの内容について詳細にたずねた。

具体的には、質問項目は次の通りである。①実習生がどのような利用者支援（面接、ケア等の直接支援、居環境整備などの間接支援、カンファ

表 1 実習生の性別

	人数 (%)
女性	130(75.1)
男性	43(24.9)
合計	173(100.0)

表 2 実習生の学年

	人数 (%)
3 回生	129(74.6)
4 回生	44(25.4)
合計	173(100.0)

表 3 実習配属類型

	人数 (%)
児童分野	39(19.7)
高齢者分野	61(35.3)
障害者分野	56(31.2)
社会福祉協議会	24(13.9)
合計	173(100.0)

レンス等の調整業務)を経験したか。②ケアワーク、間接支援業務の具体的な項目。③ソーシャルワークに関連する業務の学び、ソーシャルワークの学び。④スーパービジョンの実際。なお、本稿では、考察対象とするソーシャルワークの学びとケアワークの実施に関連する項目についてのみ報告する。3 回の調査全体の詳細な報告については、調査報告書⁽³⁾を参照されたい。

(2) 調査の実施概要

①調査日時：2013 年 12 月～2014 年 1 月

②調査方法：自計式質問紙調査

③調査対象：2013 年度に社会福祉実習を修了した実習生 177 名中 173 名（回収率 97.7%）。

回答者の男女別・学年別内訳、及び配属分野について示す（表 1, 2, 3）。

5. 実習内容調査の結果

(1) ソーシャルワークの学び

社会福祉実習は、社会福祉現場でのソーシャルワークを学ぶことを第一義とする。調査では実習

生がどのように「ソーシャルワークを学んだか」を確認したかった。しかし、「はじめに」の項で述べたとおり、生活型施設でのソーシャルワークは利用者に対する日常的な支援の一環として実施されることも多く、実習生にとって「ソーシャルワーク支援」を抽出するのは容易ではない。そこで、調査では、事実として実習先の「社会福祉士の職務を学ぶ機会があったか」についてたずねた。また、学ぶ機会があった場合は、どのような方法で学んだかについてたずねた。回答は表4に示す。

9割近い実習生が、社会福祉士の職務を学ぶ機会があったと回答している。これを児童分野（生活型施設、通所型施設、支援機関を含む。以下の分野も同様）・高齢者分野・障害者分野・社会福祉協議会の配属類型別に集計したのが表5である。高齢者分野、社会福祉協議会の実習生は「学ぶ機会があった」と回答している者の割合が高かった。社会福祉士をもつ指導者がいることが実習施設の要件であり、その職務を学ぶ条件は同様に確保されているが、高齢者分野では介護福祉士職務の専門性と明確に区分されている率が高いこと、社会福祉協議会では在宅高齢者等の相談援助の現場を見聞きする割合が高いことで、実習生が

相談援助職としての社会福祉士の専門性を理解しやすかったことが考えられる。このことは、児童福祉施設等での日常的な生活支援が、どのようにソーシャルワークにつながるかに関して、理解を導く指導が必要なことを示唆する。

社会福祉士職務を学ぶ方法としては「職務について話を聞く」が一番多かった（表6）。学ぶ方法として実際に面接等を実施したのは、1割強である。この結果を配属類型別に集計したのが表7である。同行実習については、8割以上の高齢者分野の実習生が経験したと答えている。また、面接の同席においても配属類型の中で高い割合を示した（実習生の36.1%が経験）。指導を受けながらの利用者面接は、社会福祉協議会実習生が高い実施率となった（25.0%）。実習配属先の利用者の特性・発達段階・本人や保護者からの同意の有無等により、職務の学び方に違いや制約があったことが予測される。

表6 社会福祉士の職務をどのように学んだか（複数回答）

*カッコ内は実習生全員に対する実施率（%）

項目	人数（%）
社会福祉士の職務に同行した	99(57.2)
社会福祉士の職務の観察実習をした	76(43.9)
職務について話を聞いた	107(61.8)
社会福祉士の実施する面接に同席した	37(21.4)
指導を受けて利用者の面接を実施した	24(13.9)
その他	8(4.6)

*その他には、ロールプレイの実施、介護保険申請手続きなどへの同席、地域会議の傍聴、入所のサービス担当者会議に同席、模擬面接の実施、利用者との関わりを通して利用者理解を深める中で学んだ、という回答があった。

表4 社会福祉士の職務を学ぶ機会があったか

	人数（%）
あった	155(89.6)
なかった	8(4.6)
どちらともいえない	9(5.2)
無回答	1(0.6)
合計	173(100.0)

表5 配属類型別×社会福祉士の職務の学び

*カッコ内は、配属類型内での実施率（%）

	社会福祉士の職務を学ぶ機会があった	社会福祉士の職務を学ぶ機会がなかった	どちらともいえない	無回答	合計
児童分野	26(74.3)	6(17.1)	3(8.6)	0(0.0)	35(100.0)
高齢者分野	60(98.4)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.6)	61(100.0)
障害者分野	46(86.8)	2(3.8)	5(9.4)	0(0.0)	53(100.0)
社会福祉協議会	23(95.8)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	24(100.0)
合計	155	8	9	1	173

表7 配属類型別 社会福祉士の職務の学び方

*カッコ内は類型内での実施率(%)

	同行実習	観察実習	話を聞く	面接同席	利用者面接
児童分野	10(28.6)	9(25.9)	18(51.4)	2(5.7)	0(0.0)
高齢者分野	49(80.3)	30(49.2)	39(63.9)	22(36.1)	10(16.4)
障害者分野	23(43.4)	25(47.2)	31(58.5)	5(9.4)	8(15.1)
社会福祉協議会	17(70.8)	12(50.0)	19(79.2)	8(33.3)	6(25.0)
合計	99	76	107	37	24

表8 利用者の環境調整のための支援に関する学び

項目	はい	いいえ	どちらとも いえない	その他	合計
家族支援について学ぶ機会があった	89(51.4)	83(48.0)	1(0.6)	0(0.0)	173(100.0)
地域支援について学ぶ機会があった	134(77.5)	38(30.0)	1(0.6)	0(0.0)	173(100.0)
他機関との連携について学ぶ機会があった	112(64.7)	60(34.7)	1(0.6)	0(0.0)	173(100.0)
他職種とのケースカンファレンス等会議について学ぶ機会があった	103(59.5)	62(35.8)	8(4.6)	0(0.0)	173(100.0)
事例検討、ケース会議について学ぶ機会があった	107(61.8)	56(32.4)	8(4.6)	2(1.2)	173(100.0)

(2) 利用者の環境調整のための支援に関する学び

実習施設でのソーシャルワークの目的は、個々の利用者のニーズに添った自己実現に集約される。この目的の実現には施設・機関内の専門職の連携だけでなく、利用者の家族や地域等、その環境に働きかけることが重要となる⁽⁴⁾。利用者の環境調整として実施される「家族支援」、「地域支援」、「他機関連携」、「他職種とのケースカンファレンス」、「ケース会議」について、実習で学ぶ機会があったか否かについてたずねた。なお、「学ぶ機会の有無」は、これらの項目を経験したことに限らず、項目についての話を聞いて学んだ、ということも含まれる。結果は表8に示す。

「地域支援を学ぶ機会」については7割以上が学ぶ機会があったと回答しているが、「家族支援について学ぶ機会」の回答は5割程度になっている。地域支援を学ぶ機会の割合が多いのは、施設の地域行事が多い秋に実習時期があることや、定期的な地域会合等があれば23日間の実習期間中に学べること、地域福祉推進の専門機関である社会福祉協議会で100%地域支援について学べたと回答していること、等が影響していると考えられる。一方、家族支援を学ぶ機会が少ないのは、実習期

間中に家族支援の場面があるとは限らないこと、実習生への情報開示に対して家族の同意が得られるとは限らないこと、等が考えられる。

環境調整に関わる支援は、利用者に関わる他の専門職や他機関からの情報を得ることで、支援における多角的な視点を学ぶ機会となると同時に、利用者理解を深めることにもつながりうる。しかし、一方では、関わりが浅い段階で家族の情報や生活歴など様々な情報を得ることは、先入観をもって利用者に関わることに繋がると危惧する実習施設もある。このため、環境調整の場への実習生の参加や情報開示については、各実習施設の判断が異なるのが現状である。

(3) 支援計画の作成

利用者のニーズに添った自己実現に向けて効果的な支援を提供し、その支援を評価してさらにより良い支援を行うために、個々の利用者の支援計画が作成される。計画作成には利用者理解、社会福祉サービスについて熟知していることが求められ、実習生が実施するにはハードルが高い作業であるが、実習への取り組みの成果として支援計画作成を課す実習施設も多い。実習において支援計

画等を作成したか否かについての回答を表9に示す。また、配属施設類型別の回答を表10に示す。7割弱の実習生が支援計画を作成したと回答しているが、配属類型により、実施に差があることがわかる。社会福祉協議会で実施率が低いのは、「地域診断」等が実習の短期間では困難であるためと予測する。

支援計画を作成しなかった理由を表11に示す。支援計画を作成しなかった理由について、「計画作成が実習内容になかった」という理由と、作成を望んだが様々な事情で「許可されなかった」という方向があることがわかった。その他には、「施設の方針として実習生には支援計画は立てさせないから」、「アセスメントを行い、指導者からフィードバックを得たが計画は立てなかった」、「計画をたてることより、利用者と一緒にいる時間を大切にしたい」、「支援計画以外の計画を作成した」、等の回答があった。

(4) ケアワーク実施の有無

2008年からの社会福祉士養成カリキュラムにおいては、他職種との差別化を図る観点から「社会福祉士実習においてケアワークは実施しない」ことが規定された⁽⁵⁾。しかし、支援技術が未熟な実習生にとっては、利用者との関係を深めるのにケアワークは有効な手段となりうると考える。ソ

シャルワークの理解とケアワークの実施についての検証は後で行うが、ここでは実習生がケアワークを経験したかどうかについてたずねた。

実習で利用児・者に対するケアワークを経験したかどうかについての結果を表12に示す。また、配属類型別にケアワーク経験の有無についてクロス集計を行った結果を表13に示す。社会福祉協議会の実習ではケアワークを経験したという回答が4割を切るが、その他の施設類型では、高い割合で実習生が利用者に対するケアワークを経験していることが確認できた。

(5) 社会福祉士の学びとの関連の検証

実習生が経験した項目が、社会福祉士の学びと関連しているかどうかを確認するため、(2)から(4)の回答と「社会福祉士の職務について学ぶ機会」の回答についてクロス集計を行った。なお、それぞれの結果は「学ぶ機会があった」か、「学ぶ機会がなかった」か（学ぶ機会があったといいきれない「どちらともいえない」という回答を含む）、の2分割にまとめて検討した。それぞれの項目間の関連について確認するためカイ2乗検定を実施したところ、「他職種会議を学ぶ機会」($\chi^2(1) = 10.378, p < .01$)「家族支援について学ぶ機

表9 支援計画を作成したか

項目	人数 (%)
作成した	117(67.6)
作成しなかった	55(31.8)
無回答	1(0.6)
合計	173(100.0)

表11 支援計画を作成しなかった理由

項目	人数
特に興味がなかった	5
勧められたが時間がなかった	11
資料不足など、条件が整わなかった	16
計画作成が実習内容になかった	13
許可されなかった	3
その他	8

表10 配属類型別 支援計画の作成

*カッコ内は、配属類型内での実施率(%)

	作成した	作成しなかった	無回答	合計
児童分野	22(62.9)	12(37.1)	0(0.0)	35(100.0)
高齢者分野	46(75.4)	14(23.0)	1(1.6)	61(100.0)
障害者分野	43(81.8)	10(18.9)	0(0.0)	53(100.0)
社会福祉協議会	6(25.0)	18(75.0)	0(0.0)	24(100.0)
合計	117	55	1	173

会」($\chi^2(1)=6.014, p<.05$)の項目について有意な偏りが見られたため、残差分析をおこなった。結果は表 14, 15 のとおりである。

他職種会議、家族支援について「学ぶ機会があった」と答えた実習生は「社会福祉士の職務を学ぶ機会があった」と回答し、「学ぶ機会がなかった」実習生は、「社会福祉士の職務を学ぶ機会がなかった」と回答している割合がそれぞれ有意であった。この結果から、他職種会議、家族支援について学ぶ機会の有無は、社会福祉士の職務を学べた、という結果と関連するといえる。つまり、実習生にとっては他職種会議、家族支援についての学びは、社会福祉士の独自性が判別しやすい機会であると考えられる。その他の項目については、実習でのケアワーク経験を含め有意な関係が

表 12 利用者に対するケアワークを経験したか

項目	人数 (%)
経験した	138(79.8)
経験しなかった	33(19.1)
どちらともいえない	1(0.6)
合計	173(100.0)

表 13 配属類型別 利用者に対するケアワーク経験

*カッコ内は配属類型内での割合 (%)

	経験した	経験しなかった	どちらともいえない	合計
児童分野	30(85.7)	4(11.4)	1(2.9)	35(100.0)
高齢者分野	57(93.4)	3(4.9)	0(0.0)	61(100.0)
障害者分野	42(79.2)	11(20.8)	0(0.0)	53(100.0)
社会福祉協議会	9(37.5)	15(62.5)	0(0.0)	24(100.0)
合計	138	33	1	173

表 14 社会福祉士の職務について学ぶ機会の有無×他職種会議を学ぶ機会の有無

	他職種会議を学ぶ機会があった	他職種会議を学ぶ機会がなかった
社会福祉士の職務を学ぶ機会があった	99▲	56▽
社会福祉士の職務を学ぶ機会がなかった	4▽	13▲

$\chi^2(1)=9.939, p<.01$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

表 15 社会福祉士の職務について学ぶ機会の有無×家族支援を学ぶ機会の有無

	家族支援を学ぶ機会があった	家族支援を学ぶ機会がなかった
社会福祉士の職務を学ぶ機会があった	85▲	70▽
社会福祉士の職務を学ぶ機会がなかった	4▽	13▲

$\chi^2(1)=6.014, p<.05$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

見られなかった。よって、ケアワーク経験と社会福祉士の職務の学びの関連は、ここでは確認できなかった。

6. pre 調査, post 調査, 実習内容調査, 全体を通じての考察

pre, post, 実習内容の3回の調査は、ソーシャルワークとケアワークの関連を考察するために全体として設計された。ここでは、3回全ての調査結果の分析から、ソーシャルワークの学び、及びソーシャルワークとケアワークの関連について考察する。なお、以降の内容は、3回の調査に全て回答した実習生 169 名の回答に基づく。

(1) ソーシャルワークに必要な項目の pre-post の個人内での変化

社会福祉現場で実施されている支援項目について、実習前後でソーシャルワークに必要と思う程度に変化が見られるかどうかを検証した。全体の詳細な考察は近藤(2014)が実施しているため、ここでは pre-post での個人内の変化についてのみ検証する。

表 16 ソーシャルワークに必要と思う程度 pre-post の個人内の変化

項目	不要の方向 に変化	必要の方向 に変化
コミュニケーション	1	3
身体的介助	26	18
家事援助	37	32
他職種とのケースカンファレンス	4	6
ボランティアの指導	23	34
ケアパッケージの作成	23	33
同僚の仕事の相談に応じる	8	11
家族との面談	9	6
日中の作業・レク支援	12	5
支援計画の作成	5	5
地域住民への相談・講座	12	14
退所準備	22	40*
食事作り	39	38
インテーク面接	9	24**

(*: $p = 0.030$, $p < .05$, **: $p = 0.0135$, $p < .01$)

各実習生の回答を、pre-post で必要から不要（必要、どちらかといえば必要、から どちらともいえない、どちらかといえば不要、不要）に変化したもの、不要から必要（不要、どちらかといえば不要から どちらともいえない、どちらかといえば必要、必要）に変化したものに分けて集計した。結果は表 16 のとおりである。

それぞれの項目について「ソーシャルワークに必要か不要か」の変化を直接確率計算により検定した結果、「退所準備」「インテーク」の項目において、不要から必要の方向に変化した実習生の人数がその逆の人数より有意に多くなった（それぞれ $p = 0.030$, $p = 0.0135$ ）。したがって、「退所準備」「インテーク面接」に対するソーシャルワークの必要性を認識させることについて、実習参加の効果があったと言える。

(2) 「ソーシャルワークの理解程度」と関連した実習項目

post 調査において「ソーシャルワークをどの程度理解できたか」について「よく理解できた」から「全く理解できなかった」までの 5 段階尺度で実習生に回答を求めた。この回答を「理解できた

（『よく理解できた』と『少しは理解できた』を合わせた回答）」と、「理解できなかった（『どちらともいえない』『あまり理解できなかった』を合わせた回答。なお『全く理解できなかった』と回答した者はいなかった）」の 2 分割に整理し、3 回の調査の各項目が、ソーシャルワークの理解と関連しているかどうかについて検討した。

「ソーシャルワークを理解できた程度」の回答と、3 回の調査の回答、a) pre 調査のプロフィールの各項目（実習参加の動機、実習参加前の支援対象者に対するケア経験⁶⁾）の回答、b) post 調査の「利用者を理解できたか否か」「利用者との良い関係をもてたか否か」の回答、及び c) 実習内容調査の各項目（社会福祉士職務、他職種連携、ケース会議、家族支援、地域支援、他機関連携の学びの機会、支援計画の作成）の回答、それぞれについてクロス集計を行った。各項目間の関連について検討するためにカイ 2 乗検定を実施したところ、「支援対象者のケア経験の有無」($\chi^2(1) = 5.006$, $p < .05$)、「利用者を理解できたか否か」($\chi^2(1) = 13.791$, $p < .01$)「利用者との良い関係をもてたか否か」($\chi^2(1) = 6.751$, $p < .01$)、の項目について有意な偏りが見られたため、残差分析を行った。また、「社会福祉士職務を学ぶ機会の有無」($\chi^2(1) = 3.565$, $.05 < p < .10$)の項目については、有意な傾向が見られた。結果は表 17, 18, 19, 20 に示す。

支援対象者のケア経験がある実習生は「ソーシャルワークを理解できた」と回答し、ケア経験がない実習生が「ソーシャルワークを理解できなかった」と回答している割合が有意であった（表 17）。よって、支援対象者のケア経験は、ソーシャルワークの理解と関連するといえる。このことは、実習参加前に支援対象者について学び、関わる経験をもつことが、実習中の学びに影響することを示唆する。

同様に、「利用者を理解できた」「利用者との良い関係をもてた」と回答した実習生が「ソーシャルワークを理解できた」と回答し、「利用者を理解できなかった」「利用者との良い関係をもてなかった」と回答した実習生は、「ソーシャルワークを理解できなかった」と回答している割合がそれぞ

表 17 ソーシャルワークの理解程度×支援対象者のケア経験の有無

	支援対象者のケア経験があった	支援対象者のケア経験がなかった
ソーシャルワークを理解できた	92▲	46▽
ソーシャルワークを理解できなかったといえない	14▽	17▲

 $\chi^2(1) = 5.006, p < .05$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

表 18 ソーシャルワークの理解程度×利用者理解できたか否か

	利用者を理解できた	利用者を理解できなかった
ソーシャルワークを理解できた	133▲	7▽
ソーシャルワークを理解できなかったといえない	24▽	5▲

 $\chi^2(1) = 13.791, p < .01$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

表 19 ソーシャルワークの理解程度×利用者と良い関係がもてたか否か

	利用者と良い関係をもてた	利用者と良い関係がもてなかった
ソーシャルワークを理解できた	122▲	15▽
ソーシャルワークを理解できなかったといえない	22▽	9▲

 $\chi^2(1) = 6.751, p < .01$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

表 20 ソーシャルワークの理解程度×社会福祉士の職務について学ぶ機会の有無

	社会福祉士の職務を学ぶ機会があった	社会福祉士の職務を学ぶ機会がなかった
ソーシャルワークを理解できた	126	11
ソーシャルワークを理解できなかったといえない	25	6

 $\chi^2(1) = 6.014, .05 < p < .10$

れ有意であった(表 18, 19)。この結果から、利用者理解、利用者との関係構築は、ソーシャルワークの理解と関連することが確認できた。

「社会福祉士職務を学ぶ機会の有無」と「ソーシャルワークの理解程度」との関連には有意な傾向が見られた(表 20)。この結果から、社会福祉士職務を学ぶこととソーシャルワークの理解は、関連は想定されるが、その関係は必ずしも明確に断定できないことを示唆する。また、「社会福祉士の職務を学ぶ機会の有無」とは関連が確認できた「家族支援」「地域支援」、その他の環境調整のための支援項目は、「ソーシャルワークの理解程度」との関連は確認できなかった。

利用者の環境調整に関わるソーシャルワーク支援の各項目ではなく、利用者との関係に関わる「利用者理解」「利用者との関係構築」の項目に対してソーシャルワーク理解との有意な関連が確認できたのは興味深い。これは、実習生は、まず利

用者との関係においてソーシャルワーク支援の必要性を認識することを示唆する。利用者との関わりを日々積み重ね、理解を深めていくことで、実習生は「利用者の側に立った支援」というソーシャルワークの視点を学んでいくことが考えられる。

(3) ソーシャルワーク理解に役立った内容(自由記述)の分析

post 調査の「ソーシャルワークが理解できたか」の回答で、「よく理解できた」「少しは理解できた」を選択した者については、具体的に理解に役立った内容について自由記述で回答を求めた。この自由回答に用いられた語句を SPSS Text Analysis を用いてカテゴリー化し、実習において何がソーシャルワークの理解につながったかを検討した。

検討の対象となったのは、「ソーシャルワーク

表 21 ソーシャルワーク理解に役立った内容
自由記述使用語句

使用語句	人数
利用者、対象者	38
役割・業務・実践	20
現場、施設、実習先	19
支援、援助	18
関わり、接し方	18
実際	18
職員、指導者	17
理解、学び	16
コミュニケーション、会話	16
理念、価値、ニーズ	14
ソーシャルワーカー、社会福祉士	12
観察	11
同行、参加、見学	10
地域、近隣	10
話、指導、アドバイス	9
機関・職種・連携	8
相談援助、ソーシャルワーク	8
面接、面談	7
ケアワーク、生活支援	6
支援計画	6

の理解に具体的に役立った内容」について記入した 154 名分の自由回答の記述である。配属先の類型別に見ると、児童分野 31 名、高齢者分野 51 名、障害者分野 49 名、社会福祉協議会 21 名であった。

語句の抽出に先立ち、文脈から判断して同じ内容を示すと判断できる語句（例えば、「利用者」と「利用者さん」「相手」等）や、同じカテゴリーに入れることが可能と判断できる語句（例えば、「社共ワーカー」を「ソーシャルワーカー」に含める）を代表語にまとめる作業を実施した。その上で、6 個以上（＝6 人以上、Text Analysis では同じ回答者については複数回用いたとしても同じ語句は 1 個とカウント）で使用された語句をカテゴリーとして抽出した。検討対象とした語句とそれぞれの使用頻度は、表 21 に示す。

様々な語句と同時に使用された「利用者・対象者」が最も多く、「役割・業務・実践」「現場・施設・実習先」が続く。これらの語句と同時にどの

ような語句が多く使用されたかを、クロス集計を行い確認した。結果は表 22 に示す。

「利用者」と最も多く用いられたのは「関り・接し方」で、「支援・援助」、「職員」「実際」が続く。実習生が、利用者の支援に関して自ら関わることで、職員の関わり方、支援の実際から学んだことがわかる。その他、多い組み合わせとしては、「ソーシャルワーカー、社会福祉士」の「役割・業務」、「職員・指導者」の「話、指導、アドバイス」があげられ、それぞれの内容（「社会福祉士の役割・業務」「職員からのアドバイス」等）がソーシャルワークの理解に役立ったことがわかる。また、「ケアワーク、生活支援」についても抽出されていることに着目しておきたい。

配属類型ごとに語句をまとめたのが表 23 である。もともとの回答者数が各類型で異なるため、類型別回答者内での割合をカッコ内に示した。「利用者」は、全ての類型で使用頻度が高いが、類型により特徴のある語句も見られることがわかる。

児童分野においては「ソーシャルワーカー、社会福祉士」の語句は使われなかったが、福祉士職務に関連の深い「機関・職種連携」は、他類型より多く使われている。これは、児童の自立支援には、地域での支えや児童相談所をはじめとする他機関との連携が重要であることを学んだためと考えられる。「児童の自立のためには地域の協力が不可欠」「専門機関や施設内の連携が必要」等の回答がみられた。高齢者分野では「役割・業務」の回答が他類型よりも多く見られた。「相談員の役割が分かった」「ソーシャルワーカーの業務を経験できた」等、社会福祉士の業務を実際に同行、見学した実習内容を反映していると考えられる。また、「コミュニケーション、会話」の使用頻度も高くなっている。障害者分野においては「支援計画」が理解に役立ったという回答が他類型よりも多かった。社会福祉協議会においては「ソーシャルワーカー、社会福祉士」という語句の使用率が高かった。「ワーカーと地域住民との関係から学んだ」等、ソーシャルワーカーの地域支援職務や地域住民との関わりから、実習生が多くを学んだことが推測される。

表 22 使用された単語同士のクロス表

*太字・太枠内は、各単語カテゴリーの使用頻度を示す

	利用者・対象者	役割・業務・実践	現場・施設・実習先	支援・援助	関わり・接し方	実際	職員・指導者	理解・学び	会話 コミュニケーション・	理念・価値・ニーズ	社会福祉士 ソーシャルワーカー・	観察	同行・参加・見学	地域・近隣	話・指導・アドバイス	機関・職種・連携	相談援助・ ソーシャルワーク	面接・面談	ケアワーク・生活支援	支援計画
利用者・対象者	38	4	2	9	15	8	8	5	7	6	3	5	3	5	3	3	1	4	1	1
役割・業務・実践	4	20	4	3	1	4	3	4	2	3	7	1	4	1	1	0	3	3	1	1
現場・施設・実習先	2	4	19	3	2	5	2	3	0	1	3	4	3	4	2	2	4	0	0	0
支援・援助	9	3	3	18	1	1	2	4	3	4	1	1	1	4	0	3	1	1	3	0
関わり・接し方	15	1	2	1	18	7	4	2	2	0	2	5	0	4	3	1	0	0	0	0
実際	8	4	5	1	7	18	4	6	2	0	4	6	4	1	2	2	0	1	0	0
職員・指導者	8	3	2	2	4	4	17	3	2	1	0	2	0	1	7	1	0	2	0	1
理解・学び	5	4	3	4	2	6	3	16	2	0	3	3	2	1	2	2	0	0	1	1
コミュニケーション・会話	7	2	0	3	2	2	2	2	16	2	2	1	0	0	2	0	1	1	2	1
理念・価値・ニーズ	6	3	1	4	0	0	1	0	2	14	0	0	0	0	0	0	2	1	2	0
ソーシャルワーカー・社会福祉士	3	7	3	1	2	4	0	3	2	0	12	2	3	2	0	1	1	1	0	0
観察	5	1	4	1	5	6	2	3	1	0	2	11	1	3	1	1	1	1	0	0
同行・参加・見学	3	4	3	1	0	4	0	2	0	0	3	1	10	2	0	2	2	3	0	0
地域・近隣	5	1	4	4	4	1	1	1	0	0	2	3	2	10	0	2	2	0	0	0
話・指導・アドバイス	3	1	2	0	3	2	7	2	2	0	0	1	0	0	9	0	0	0	0	0
機関・職種・連携	3	0	2	3	1	2	1	2	0	0	1	1	2	2	0	8	0	1	0	0
相談援助・ソーシャルワーク	1	3	4	1	0	0	0	0	1	2	1	1	2	2	0	0	8	0	2	0
面接・面談	4	3	0	1	0	1	2	0	1	1	1	1	3	0	0	1	0	7	1	1
ケアワーク・生活支援	1	1	0	3	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	2	1	6	0
支援計画	1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6

表 23 配属類型別 ソーシャルワークの理解に役立った自由記述使用語句

*カッコ内は、配属類型内での実施率(%)

使用語句	児童	高齢	障害	社協
利用者、対象者	8(25.8)	13(24.5)	11(22.4)	6(28.6)
役割・業務・実践	4(12.9)	10(18.9)	3(6.1)	3(14.3)
現場、施設、実習先	6(19.4)	6(11.3)	4(8.2)	3(14.3)
支援、援助	7(22.6)	1(1.9)	6(12.2)	4(19.0)
関わり、接し方	6(19.4)	5(9.4)	3(6.1)	4(19.0)
実際	6(19.4)	4(7.5)	3(6.1)	5(23.8)
職員、指導者	6(19.4)	3(5.7)	6(12.2)	2(9.5)
理解、学び	5(16.1)	5(9.4)	4(8.2)	2(9.5)
コミュニケーション、会話	1(3.2)	7(13.2)	5(10.2)	3(14.3)
理念、価値、ニーズ	3(9.7)	5(9.4)	2(4.1)	4(19.0)
ソーシャルワーカー、社会福祉士、支援員	0(0.0)	5(9.4)	2(4.1)	5(23.8)
観察	3(9.7)	2(3.8)	3(6.1)	3(14.3)
同行、参加、見学	1(3.2)	5(9.4)	0(0.0)	4(19.0)
地域、近隣	3(9.7)	2(3.8)	2(4.1)	3(14.3)
話、指導、アドバイス	2(6.5)	4(7.5)	3(6.1)	0(0.0)
機関・職種・連携	5(16.1)	3(5.7)	0(0.0)	0(0.0)
相談援助、ソーシャルワーク	1(3.2)	4(7.5)	1(2.0)	2(9.5)
面接、面談	1(3.2)	3(5.7)	3(6.1)	0(0.0)
ケアワーク、生活支援	2(6.5)	2(3.8)	2(4.1)	0(0.0)
支援計画	1(3.2)	1(1.9)	4(8.2)	0(0.0)

自由回答の分析からは「ソーシャルワークを理解するために何が役に立ったか」という同じ問いに対してでありながら、配属施設によって「ケアワークのなかのソーシャルワークを学んだ(児童施設)」という回答から、「生活支援ではなく相談員の実習を行った(高齢者施設)」という回答まで様々あることがわかった。利用者支援という共通項がありつつも、ソーシャルワークの学びの根拠が大きく異なることが確認できた。

(4) ケアワークとソーシャルワークの関連

本調査全体の目的である「ソーシャルワーク」と「ケアワーク」との関連について、post 調査の「ソーシャルワーク理解の程度」と実習内容調査の「利用者に対するケアワークの実施の有無」の回答により検証した。それぞれの回答をクロス集計し、関連について検討するためにカイ2乗検定を実施したが、「ソーシャルワークの理解程度」と「利用者に対するケアワークの実施」との間に

は、有意な関連は確認できなかった($\chi^2(1) = 0.914, n.s.$)。

そこで、(2)で「ソーシャルワーク理解」と強い関連が確認できた「利用者理解」「利用者との関係構築」とケアワークとの関連について検証を試みた。

「利用者を理解できたか否か」及び「利用者との良い関係がもてたか否か」と「利用者に対するケアワークの実施の有無」についてクロス集計を行った。それぞれの項目間の関連について検討するためにカイ2乗検定を実施したところ、「利用者との良い関係がもてたか否か」とは有意な関連が確認できなかった($\chi^2(1) = 2.136, n.s.$)が、「利用者を理解できたか否か」と「利用者に対するケアワークの実施の有無」の項目について有意な偏りが見られたため($\chi^2(1) = 7.544, p < .01$)、残差分析を行った。結果は表24に示す。

「利用者に対するケアワークを経験した」実習生は「利用者を理解できた」と回答し、「利用者

表 24 利用者へのケアワーク経験×利用者を理解できたか否か

	利用者を理解できた	利用者を理解できなかった
ケアワークを経験した	129▲	6▽
ケアワークを経験しなかった	27▽	6▲

$\chi^2(1)=7.544, p<.01$ (▲有意に多い, ▽有意に少ない)

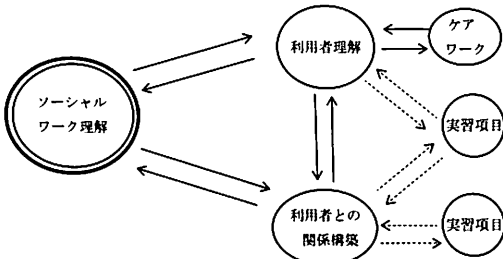


図1 実習でのソーシャルワーク理解とケアワークの関係

に対するケアワークを経験しなかった」と回答した実習生は「利用者を理解できなかった」と回答している割合がそれぞれ有意であった。この結果から、実習における利用者に対するケアワークの実施は、利用者理解に関連するということが確認できた。

以上のことから、実習でケアワークを実施することは、利用者理解に寄与することが確かめられた。利用者理解はソーシャルワーク理解と関連があることが確認されているため、次のモデルが考えられる(図1)。図1の実習項目が具体的に何を示すかについては更なる検討が必要であるが、今回の調査結果から調べたところ、「家族支援について学ぶ機会の有無」の回答が「利用者を理解することができたか否か」の回答との間に有意な関連がみられ($\chi^2(1)=6.164, p<.05$)、家族支援の学びが利用者理解に寄与することがわかった。また、「支援対象者へのケアワーク経験の有無」の回答が「利用者との良い関係をもつか否か」の回答との間に有意な関連が見られ($\chi^2(1)=7.466, p<.01$)、支援対象者へのケア経験が利用者との関係構築に寄与することがわかった。ただし、支援対象者へのケアワーク経験の有無はソーシャルワーク理解とも関連が確認されており、関係を明確にするには更に分析が必要となる。図1に示す実習項目に含まれる内容についての考察は今回の調査の域を超えており、これ以上は検討しない。

ケアワークが利用者理解と関連があり、利用者理解がソーシャルワーク理解と関連があることで、間接的にはあるが、利用者へのケアワークがソーシャルワークの理解につながることを確認できた。図1のモデルについての検証は、今後の課題としたい。

7. 考 察

今回の実習内容調査で、社会福祉実習で学生がどのような実習項目を実践しているかが明確になった。その上で、第一義の目的である「ソーシャルワークの学び」について、①他職種連携を学ぶ機会、家族支援を学ぶ機会が社会福祉士の職務理解につながることで、②ソーシャルワークの理解に利用者理解、利用者との関係構築が影響すること、③ソーシャルワークの理解に支援対象者へのケア経験等、事前の実践的な学びが重要であること、④自由回答の分析を通じて実習生のソーシャルワークの学びが配属施設によっても多様であること、⑤実習時のケアワークの実施は直接的にソーシャルワークの理解につながらないが、利用者理解を通じてソーシャルワークの理解に貢献できることを確認した。

以上の結果は、実習指導を担当する教員にとっては感覚的につかんでいる内容と一致することだが、調査を通じて確認できたことは意義がある。「利用者のニーズに沿った自己実現を側面的支援する」というソーシャルワークの目的からしても、利用者と関係を構築し、その理解を深めることの重要性は自明のことではあるが、実習生が利用者との関係構築、利用者理解をもとにソーシャルワークの学びを進めていることを確認したことで、今後の指導方法の検討につなげることができる。利用者理解とケアワークが関連するのであれば、利用者との「相談援助」や環境整備に向けた支援だけでなく、生活支援を含むケアワークをソ

ーシャルワークの学びの中に正しく位置付けることで、社会福祉実習はさらに実りの大きいものになるのではないかと。つまり、エコロジカルな視点にたち、ケアワーク実践を利用者理解のツールとして位置づけることで、個別支援計画、他職種連携、他機関連携、地域支援、等のソーシャルワークの技法を利用者の生活と結び付けて理解することが容易になると考える。

以上のことは、大学での指導だけでなく、実習受け入れ先との協議のもとで検討していくことが欠かせない。実習生への事前の指導の重要性と、大学と実習先との連携の重要性を認識したうえで、今後も検討を進めていきたい。

注

- (1) ソーシャルワーク実習において未習熟なものにケアワークを実施させることは「リスクがある」とされる。(社団)日本社会福祉士会編(2014)社会福祉士実習指導者テキスト第2版 中央法規出版 p.40.
- (2) 例えば、伊藤嘉余子(2012)「生活型福祉施設におけるソーシャルワークの介入と調整」『ソーシャルワーク研究 38(2)』p.24-30.
- (3) 龍谷大学社会福祉現場実習プロジェクト報告書(2015)『社会福祉現場実習におけるソーシャルワークとケアワーク』参照を希望される場合は、龍谷大学社会福祉現場実習指導室(077-543-7221)か土田

(mtsuchi@soc.ryukoku.ac.jp)までご連絡いただきたい。

- (4) 国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)のソーシャルワークの定義。
- (5) 日本社会福祉士会編(2008)『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規出版 p.49-52.
- (6) 支援対象者へのケア経験は、pre 調査での実習生の「子ども・高齢者・障害者へのケア経験」の回答を配属類型とマッチングさせて生成した。

参考文献

- 鈴木有美・木野和代(2008)「多次元共感性尺度(MES)の作成－自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて－」教育心理学研究, 56, 487-497.
- 須賀亮司(2013)「相談援助実習における実習生の実態について－龍谷大学社会学部地域・臨床福祉学科の実習生へのアンケート調査より－」龍谷大学社会学部紀要, 44, 135-143.
- 近藤真由子(2014)「相談援助実習を履修した学生の意識調査についての一考察－学生の変化に着目して－」龍谷大学社会学部紀要, 45, 37-50.
- *本調査は、文部科学省科学研究費 基盤研究(C)研究代表者：土田美世子「生活型福祉施設のケアワーク構造とソーシャルワーク(課題番号25380806)の一環として実施した。